

## 慢性咳嗽に対するプレガバリンの効果

灰田美知子<sup>1)5)</sup>、橋口明彦<sup>2)5)</sup>、小川勝利<sup>3)5)</sup>、鎌田 智<sup>3)5)</sup>、黒木宏隆<sup>4)5)</sup>

半蔵門病院アレルギー呼吸器内科<sup>1)</sup>、BML<sup>2)</sup>、アミカライフサイエンス<sup>3)</sup>、バンビ-薬局一番町店<sup>4)</sup>、環境汚染等から呼吸器患者を守る会(通称)エパレク<sup>5)</sup>

【目的】慢性咳嗽は成人外来診療では最も頻度が高く、人口の約40%に起こりうる。その原因には、副鼻腔気管支症候群、アレルギー性素因、逆流性食道炎(GERD)、COPD、気管支拡張症、誤嚥、気管内異物などがあるが、鑑別してもなお、治療に苦慮する例があり、求心性知覚過敏症があるとの考えからリドカイン吸入、ビタミンB12、ガバペンチンなども試みられる。また原因特定が困難な治療抵抗性の咳嗽に対し「咳受容体感受性亢進状態(cough hypersensitivity syndrome、CHS)」の概念も登場し咳の性状が類似するのでCHSを前提とした上で後鼻漏、GERDなどに分類すべきとの意見もある。このような治療抵抗性咳嗽にガバペンチンが有効との報告があるが、今回、その誘導体のプレガバリンを使用したので報告する。

【方法】標準的治療薬に反応しない11名に咳日記の記入を依頼し、プレガバリン投与前後に咳の強さと頻度を、それぞれ4,3,2,1,0,5,0で評価した。薬剤は50mg/日から投与を開始し、眠気に注意しながら、150mg/日、300mg/日を目処に増量した。4人は正確な日記記入が出来ないと放棄したが完成出来た7名(男性2名;女性5名)の日記を集計し、投与前後の咳の強さと頻度の総合点を比較した。

【結果】有意な悪化2例、点数は低下したが有意差のないものが2例、有意な改善は3例であった。観察期間の延長で不変群にも改善傾向があり、また改善例では著効を示す症例があり、今後、さらに検討する価値があると考えた。